

【大学・一般の部】優秀賞

心豊かに

別府市 うすい はるこ
白井 治子

母が神様の元に旅立って丸三年が過ぎた。いつもどんな時も笑顔で「ありがとう」という母だった。晩年は歩けなくなり、デイサービスの方にもとてもお世話になったが、迎えに行くとスタッフの方から「白井さんは笑顔がなくて、本当に素敵なお方ですよね」と言っていただいていた。父は、母が旅立ってそのちょうど一年後、一周回ってやってきた船に乗り母の元に逝った。「夫婦で同じ日とは絆を感じますね」と多くの方に言われたが、私にしたら母の誕生日は覚えていて盛大にお祝いするのに父の誕生日をしばしば忘れる家族に父は最後の抵抗をした気もしている。

母は一人っ子だった。戦争中家族で中国に渡った。祖父は視力が低く、徴兵に取られなかったのに最後の最後で捕虜にされシベリアに抑留されて強制労働の末亡くなつた。祖母はシベリアで死んだ夫を思い、幼い母を連れて後を追う気持ちでいたのを「私が無邪気に笑っていたので思いとどまつたみたいよ」という話や祖母の兄の家に居候したので、高校には進学させてあげられないと言われ一晩泣き明かしたけれど「これが私の運命」と一晩で氣を取り直した話を何度も私たち兄弟に聞かせてくれた。

私たち三人兄弟が中学生になった頃、母は少しづつ自分のやりたかった事をやり始めた。視覚障がいのある方たちのために本の朗読のボランティア、電話相談員のボランティア、それぞれ研修を受けて学ぶ姿があった。「中学しか出でていないから色んな知識がないんよ」と言ってはたくさんの本を読み、新聞も一日二紙、隅から隅まで読んでいた。私たちに「勉強しろ」と一言も言わなかつたが、何よりこれが母の教育だったと思う。

母の遺品を整理していた時、七十歳を過ぎてから欲しがつたパソコンでたくさんの文章を打つていたが、その印刷物が出てきた。「自分史セミナー」のようなものに参加していたのを知つていて、それが出てきたのだ。その一文には「戦争が終わつて父が強制労働の末亡くなり、叔父の家に居候した私たちは厳格な叔父の『働かざるもの食うべからず』という厳しさに、育ち盛りで食いしん坊の私はご飯のお替わりを出すのをためらつた。でも食べたくて…そっとお茶碗を出していた」というものがあった。生前、食いしん坊の母を兄と私はよくからかっていた。デイサービスで夕食を食べて帰つても、仕事で遅くなつた私たちの夜食を羨ましそうに眺めていたので「食べる？」と声をかけると「食べるよ！」と元気よく答えるのを私と兄は「食いしん坊や！」と笑つた。この母の自分史に私は胸がつまり、母は家族で食卓を囲む喜びを人倍感じていたのだということと、小学生だった食べ盛りの母の背中を想像して、「もっと美味しい物を食べさせてあげればよかった」という後悔で胸がいっぱいになつた。

私が教師になつた時、母はとても喜んでくれた。ベテランと言われる年齢になり、時々強い口調になる私に「偉そうにしてはだめ、子どもの心に響かない」と口調を改めるように言つてはいた。「悩んでいる子たち、苦しんでいる子たちと一緒に並んで泳ぎなさい。池の上から腕を組んで鯉を見ているような教師にならないで」と言つてはいた。

私の勤めている高校には食物科、看護科、介護福祉のコースがあり、卒業後も地元に残り生活に根ざした仕事についている子も多い。「美味しい物は人の心を豊かにする。美味しい記憶は幸せの記憶だから」と食物科の子に話し、「病気で苦しんでいる人に寄り添える看護師になりたい」と戴帽式に誓いを立てる看護師の卵たちを見守り、人生の最後を見守る介護の仕事はどんなに素晴らしい仕事なのか話し、私は母の教育のお陰で幸せな教員生活を送ることができている。

三年間預かった生徒たちの心が豊かに育つように、これからも母の教えを守り、生徒たちと一緒に並んで泳ぐ教師でいたいと思う。